

酪農体験が生命尊重の価値観育成に与える効果についての 実践研究

鈴木由美子・中野 浩史¹⁾
(2013年2月11日受理)

Research about the effects of dairy experiences on fostering respect for life

Yumiko SUZUKI and Hirofumi NAKANO

In this paper, the authors aimed to clarify the effects of dairy experience on children's sense of respect for life. For this study, the authors focused particularly on the educational effects of experience on a dairy farm. To measure these effects, questionnaires regarding self-esteem, self-efficacy, empathy, and prosocial behavior were carried three times. A worksheet survey where respondents were allowed to express their thoughts freely was conducted 2 times. The results made the following four points clear. First, contact with local dairy farmers and dairy cows is effective in developing children's self-efficacy and self-esteem. Second, contact with local dairy farmers and dairy cows is effective in developing judgment based on respect for life. Third, hands-on activities furthered not only emotional understanding, but also intellectual understanding. Fourth is an awareness of the uniqueness and permanence of life. This led to the children to think about "respect for life".

Key words: dairy experience, education on a dairy farm, moral education, sense of "respect for life"

キーワード：酪農体験，酪農教育ファーム，道徳教育，生命尊重の価値観

研究の目的

これまで、日本の子どもにふさわしい道徳的判断基準を育成するために、どのような価値観が必要であるかを明らかにすることを目的として研究を行ってきた¹⁾。そのために、子どもや大人が「価値」という言葉でイメージすることは何かについての予備調査を行った²⁾。その結果、生命尊重が、子どもにも大人にも共通する価値観のひとつだということが示された。

生命尊重の価値観を育成する教材としては、道徳の読み物教材があげられる。道徳の読み物教材では、生命尊重の価値観は、「誕生の喜び」、「生きる喜び」、「動植物のいのちを育むことの大切さ」、「死の悲しみ」などが題材として取り上げられている。これ以外にも、動植物の飼育栽培などの実体験を通しての教育が行われている。本論では、このうち動植物の飼育栽培などの実体験に着目する。

子どもたちの実体験の不足は、日常生活のレベルか

ら多く指摘され、ボランティア活動、自然体験活動など体験活動が、道徳教育の一環として取り上げられてきている。植物の栽培では、稲や芋の植え付けを行い、収穫した米や芋を食して、生命の循環を学ぶような取り組みも行われてきている。本論では、とくに酪農体験が子どもの生命尊重の価値観育成に与える効果について検討することにする。

酪農は、牛の飼育を通して、牛乳やチーズ・バターなどの乳製品を販売し、日常的に子どもたちが口にするものに関連している。しかし実際に牛の乳搾りを体験する機会は少ない。さらに自分が乳搾りした乳が、牛乳、バター、チーズとなって自分の栄養になっていることを実感する機会はほとんどない。

酪農教育ファームは、子どもが乳搾りやバター作りを通して、生命の循環に気づき、いのちの大切さを実感できるよう支援することをひとつの目的としている。しかし、その効果はこれまで充分明らかとされてきたとはいえない。そこで本論では、酪農体

1) 高知市立秦小学校・教諭

験が子どもの生命尊重の価値観に与える効果を明らかにすることを目的とする。

研究の概要

対象：東京都内適応指導教室の小学校5年生～中学校3年生 15名

場所：石田牧場（神奈川県伊勢原市上谷 777）

全体計画：

実施日	児童生徒の活動	調査内容
2010年 10月28日 (木)	酪農家による事前学習	ワークシート1回目（事前調査） アンケート1回目（事前調査）
11月12日 (金)	酪農家による乳牛とのふれあい体験を実施	自然観察法による観察調査 ビデオ録画 酪農家へのインタビュー調査
11月15日 (月)	ふりかえり学習	ワークシート2回目（事後調査） アンケート2回目（事後調査1）
12月1日 (月)		アンケート3回目（事後調査2）

調査の概要：

アンケート調査の目的は、酪農家や乳牛とのふれあい体験学習活動（以下、ふれあい体験と略記する）が、児童生徒の「自尊感情」、「自己効力感」、「共感」、「向社会的性」に与える効果を見ることにあった。本研究では、これら4つを次のように定義することにした。「自尊感情」は、自分はたいしたものだというような自分に対する肯定的感情である。「自己効力感」は、自分にはできるというような自分の能力への肯定的感情である。「共感」は、相手の立場になって考えるような他者に寄り添う感情である。「向社会的性」は、相手の役に立ちたいというような他者に喜ばれようとする感情である。

仮説としては、ふれあい体験によってこれら4つの感情が育成されると考え、アンケート用紙を作成した。本研究では、調査項目として、「自尊感情」（自尊感情尺度）³から5項目（1-5）、「自己効力感」（特性的自己効力感尺度）⁴から5項目（6-10）、「共感」（情動的共感尺度:感情的暖かさ尺度）⁵から5項目（11-15）、「向社会的性」（社会的責任目標尺度：向社会的目標）⁶から5項目（16-20）の計20項目を選定した。選定にあたっては、あらかじめ、今回の研究に関わる酪農家、指導

員の先生方に項目の妥当性を検討してもらった。その上で、小学校教師に依頼し、小学生向きに言葉や表現を修正した。実際に用いた項目は以下の通りである。

1. 自分は大切な人間だと思う。
2. 自分には良いところがあると思う。
3. 自分はいろいろなことをうまくやれると思う。
4. 私は自分のことが好きだと思う。
5. 私は今のままの自分でよいと思う。
6. 自分でやろうと決めたことはうまくやれる方だ。
7. 会いたい人を見つけたら、自分からその人のところへ行く方だ。
8. おもしろくないことでも、最後までやりとおす方だ。
9. 何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる方だ。
10. 自分から友だちを作るのがうまい方だ。
11. テレビを見るとき、夢中になってしまう方だ。
12. 歌を歌ったり、聞いたりすると、楽しくなる方だ。
13. 動物が苦しんでいるのを見ると、かわいそうになる方だ。
14. 人が冷たくされているのを見ると、腹が立つ方だ。
15. プレゼントをした相手の人が喜ぶ様子を見るのが好きな方だ。
16. がっかりしている人がいたら、なぐさめたり、はげましてあげようと思う。
17. 友達が何かにかまっていたら、手助けしようと思う。
18. えんぴつや消しゴムをわすれた人には、自分のものをかしてあげようと思う。
19. 勉強のわからない人には、教えてあげようと思う。
20. 友達から何かをたのまれたら、それをやってあげようと思う。

アンケート調査はふれあい体験の前後で行い、ふれあい体験の効果を検証した。さらに、ふれあい体験から約2週間後にも行い、効果の持続性を検証した。

ワークシート調査をふれあい体験前後に行った。事前の質問は、「牧場に行って、どんなことをしたいですか。一番したいことを書いてください」の1問だった。事後の質問は、「牧場に行って、どんなことが心に残りましたか。一番心に残ったことを書いて下さい」、「牧場に行って、どんなことがわかりましたか。わかったことをひとつだけ書いて下さい」、「牧場に行って、不思議だと思ったことがありましたか。あったらひとつだけ書いて下さい」の3問だった。事前では、何に関心があるかを尋ねた。事後では感情的理解（心に残ったこと）、知的理解（わかったこと）、好奇

心（不思議だと思ったこと）を尋ね、ふれあい体験の何が児童生徒に影響したのか、質的に検討した。

アンケート調査もワークシート調査も、「わかば教室」の指導員が指導時間内に行った。

体験活動の概要：

事前学習では、酪農家が直接「わかば教室」に出向き、牧場や牛とのふれあいの様子、自分の仕事への思いなどについて話した。主な内容は以下の通りである。事前学習の内容

内容	具体的な説明
牛の紹介	ホルスタインやジャージー種の違い。一匹一匹姿も性質も異なること。白いマツゲの牛がいること。
酪農家の仕事の紹介	牛と挨拶することから始める。えさはわら、干し草、トウモロコシなど。搾乳をするときは、相手も生き物だから優しくやる。
自分の思い	苦労はあるがやりがいもある。牛たちが無事しているとき、小学生たちが見学に来て喜んでくれた様子を見る時、牛にご飯をあげているとき、やりがいや楽しさを感じる。
(質問に答えて)酪農家の仕事について	仕事は午前5時半～10時、4時～8時。牧場の管理、堆肥、牧草の収穫、えさやりなどを毎日やっている。
なぜ酪農家になったのか	酪農をしている父親をカッコいいなと思っていた。母がバター作りの専門家で尊敬している。中学3年生のとき牧場をやる希望を持ち、農業高校に進み、酪農大学、ニュージーランドにも留学した。
自分が工夫していること	牛によって体重や妊娠しているなど状況が異なるので、一頭一頭の栄養を考えている。
牧場をやった良かったこと	自分が仕事をする中で父母が楽になること。皆が大変なときに助けることができ嬉しい。

乳牛とのふれあい体験当日のスケジュールは、以下の通りであった。

ふれあい体験の内容：

時間	児童生徒の活動	活動のねらい
10:50-11:00	はじめの挨拶	体験への導入
11:00-11:20	バター作り	自尊感情、自己効力感の育成
11:20-11:50	牛のえさやり	共感、向社会性の育成

12:00-12:40	乳搾り体験	いのちの温かさへの気づき
12:40-13:00	子牛とのふれあい	いのちの循環への気づき
13:00-13:45	自分が作ったバターを使った昼食会	酪農体験の意義の実感、共有
13:45-14:00	おわりの挨拶	今日の学びを共有

結果と考察

1. アンケート調査の結果

「自尊感情」「自己効力感」「共感」「向社会性」の4項目について、「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」で尋ね、それぞれ4点、3点、2点、1点で数値化し、項目ごとに平均値を算出した。比較のために、体験していない児童生徒の4項目の平均値も算出した。第1回目は10月28日、第2回目は11月15-19日、第3回目は12月1-3日に行った。結果は以下の表の通りである。

表1 ふれあい体験の効果（体験した児童生徒15名）

	自尊感情	自己効力感	共感	向社会性
1回目	2.2	2.6	3.3	3.4
2回目	2.3	3.4	2.7	3
3回目	2.7	3	2.9	2.8

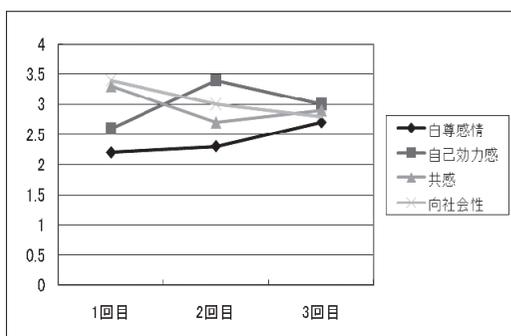


図1 ふれあい体験前後の変容（体験をした児童生徒）

表1-1、図1-1に見られるように、ふれあい体験活動直後には、「自尊感情」得点と「自己効力感」得点が高くなった。それに対し、「共感」得点と「向社会性」得点は低くなった。これらの傾向は事後も続いており、1回目には、最高点と最低点の差が1.2ポイントあったが、2回目には1.1ポイント差、3回目には0.3ポイント差に縮まっている。また2回目より

も3回目の方が、「自尊感情」得点と「共感」得点が高くなっている。体験後から時間がたつほど、「自尊感情」「自己効力感」「共感」「向社会性」得点のバランスが取れるようになったといえる。ふれあい体験をしなかった児童生徒と比較してみると、違いが明らかである。

表2 アンケート2回目・3回目の結果（体験しなかった児童生徒4名）

	自尊感情	自己効力感	共感	向社会性
2回目	2.4	3.3	2.8	3.2
3回目	2.5	3.3	3.1	3.1

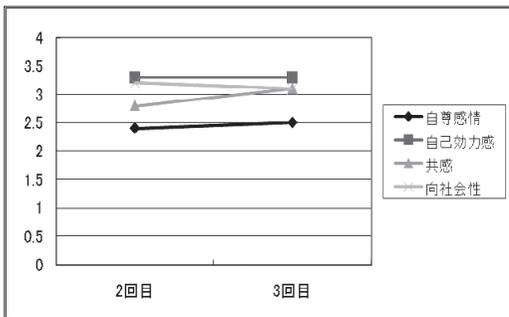


図2 2回目・3回目のアンケートの結果（体験をしなかった児童生徒）

表1-2, 図1-2に見られるように、ふれあい体験活動をしなかった児童生徒においては、「自尊感情」得点が低く、「自己効力感」「共感」「向社会性」得点は高いままである。2回目の最高点と最低点の得点差は0.9ポイントで、3回目は0.8ポイントであり、ほとんど変わっていない。

以上から、アンケート調査によって明らかになったふれあい体験の効果は、次の2点にあるといえる。第1点は、「自尊感情」得点と「自己効力感」得点の向上に効果的だということである。第2点は、「自尊感情」「自己効力感」「共感」「向社会性」のバランス感覚の育成に、持続的に効果的だということである。

2. ワークシートの分析結果

ワークシートは、セルマンの社会的視点取得理論に基づいて、鈴木・松田が作成したカテゴリー表を用いて分類した⁷（表2-1参照）。分類にあたっては複数の大学院学生に独立して分類してもらい、研究者と一緒に協議して一致させた。カテゴリーにあてはまらない意見や無記入は、その他に分類した。

表3 カテゴリー分類表

思考の分類	思考の例
自己中心思考	わたしは～したい。わたしは～思った。
他者思考	牛は～だと思った。子牛は～だった。
自他相互思考	酪農家というものは～だ。 牛というものは～だ。

表4 ワークシートの分析結果（%）

	事前	事後	
		感情的理解	知的理解
自己中心思考	50	16.7	0
他者思考	25	58.3	83.3
自他相互思考	0	25	16.6
その他	25	0	0

表2-2からわかるように、ふれあい体験前には、自己中心思考を示す児童生徒が多かった。それに対し、ふれあい体験後には、他者思考を示す児童生徒が増加した。とくに、知的理解において、他者思考を示す意見が多かった。また自他相互視点の意見も増加した。他者思考とは、この場合、牛や酪農家の立場に立って考える思考である。自他相互思考とは、この場合、牛にとっても、酪農家にとっても、自分にとっても納得できる客観的な思考を持つことである。セルマンにしたがえば、自己中心思考から他者思考、自他相互思考への移行は、道徳性の高まりを示している⁸。本研究の結果は、児童生徒がふれあい体験活動を通して、新たな道徳的思考を獲得したことを示唆している。以上から、ふれあい体験は、児童生徒の道徳性の向上に効果的だったと考えられる。

3. 個々人の結果

次に、ふれあい体験が個々の児童生徒に与えた影響を見るために、アンケート調査の結果とワークシートの記述とを検討する。個々人の結果は様々であるが、紙幅の関係でここでは、全体傾向と同じような傾向を示した児童生徒の中から4名を取り上げる。プライバシーに配慮し、生徒はA, B, と名づけることにした。また、ワークシートの記述は、個人が特定されないように、内容が変わらない程度に修正している。

1) 生徒Aの結果について

表5 生徒Aの結果

	自尊感情	自己効力感	共感	向社会性
1回目	2.4	1.8	2.8	3.6
2回目	1.8	3.6	3	2.6
3回目	2.6	2.4	3	3

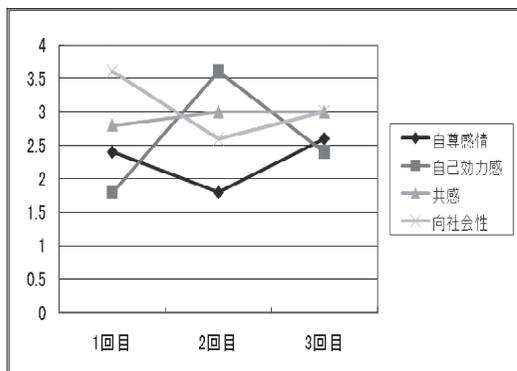


図3 生徒Aの変容

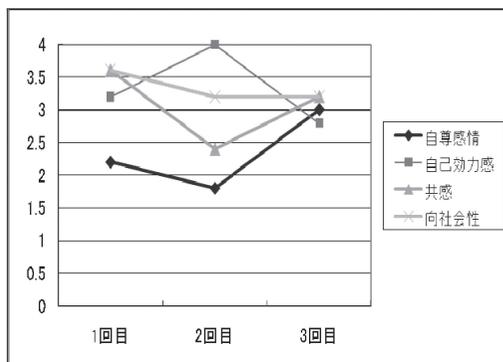


図4 生徒Bの変容

以上からわかるように、事前では「向社会的性」得点が高く、「自己効力感」得点が低かった。ふれあい体験直後には、「自己効力感」得点上がり、「自尊感情」「向社会的性」得点が下がった。ふれあい体験の2週間後には、「自尊感情」得点上がり、「自己効力感」得点が下がった。ふれあい体験の効果として、「自己効力感」得点が向上したことがあげられる。持続的な効果としては、「自尊感情」「自己効力感」「共感」得点が事前よりも上がったことがあげられる。

この生徒は、ふれあい体験で一番心に残ったこととして、「牛のエサやり」をあげ、「牛にエサをあげたら食べてくれたので、とてもうれしかった」と述べている。わかったこととして、「牛の顔の大きさ」や「牛の顔が細長かったり、四角かったりすること」をあげている。不思議だと思ったこととして、「牛がかみつきたりしないこと」をあげている。また「ほかの動物は逃げたりかみつきたりするのに、牛はどうして何もしてこないのか」と述べている。牛にエサをやって食べてもらったことが、自分にはできるといった「自己効力感」を育んだと考えられる。また、牛の顔の形が一頭一頭異なることに気づいたことが、自分はわかったといった「自己効力感」を育んだと考えられる。この生徒は、牛がほかの動物と異なる性質を持っていることについての気づきを述べている。自分の気づきが表出できたことも、「自己効力感」が育まれたことを示しているといえよう。

2) 生徒Bの結果について

表6 生徒Bの結果

	自尊感情	自己効力感	共感	向社会的性
1回目	2.2	3.2	3.6	3.6
2回目	1.8	4	2.4	3.2
3回目	3	2.8	3.2	3.2

以上からわかるように、事前では全体的に得点が高い中で、「自尊感情」得点が他に比べて低かった。ふれあい体験直後には、「自己効力感」得点上がり、「自尊感情」「共感」「向社会的性」得点が下がった。ふれあい体験の2週間後には、「自尊感情」「共感」得点は上がったが、「自己効力感」得点が下がった。ふれあい体験の効果として、「自己効力感」得点が上がったことがあげられる。持続的な効果として、「自尊感情」が向上したことがあげられる。

この生徒は、ふれあい体験で一番心に残ったこととして、「乳しぼりをしたこと」と「子牛を見たこと」と「牛のおしりを見たこと」をあげている。わかったこととして、「牛も人のようにいろいろな性格の子がいるということ」をあげている。また不思議だと思ったこととして、「牛同士がすごく近くにいるのに、けんかしないのかと思った」ことをあげている。

乳搾りや牛の観察のように具体的に結果が出る体験を通して、自分にもできるという「自己効力感」が育まれたと考えられる。また、牛にもいろいろな性格の牛がいることを体験的に知ったことで、自分は自分のままでいいのだという「自尊感情」が芽生えたと考えられる。この生徒は、牛の穏やかな性質についての思いを述べている。こうした思いを表出できたのも、「自己効力感」が育まれたことを示しているといえよう。

3) 生徒Cの結果について

表7 生徒Cの結果

	自尊感情	自己効力感	共感	向社会的性
1回目	1.6	2.4	3	4
2回目	1.6	3.6	3	2.8
3回目	2.8	2.8	3.2	2.8

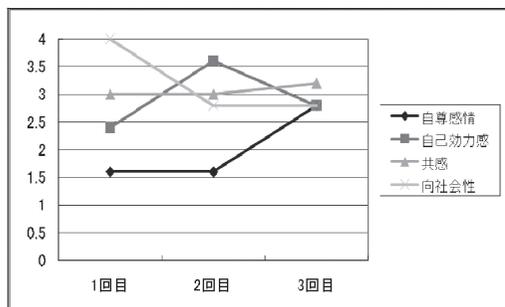


図5 生徒Cの変容

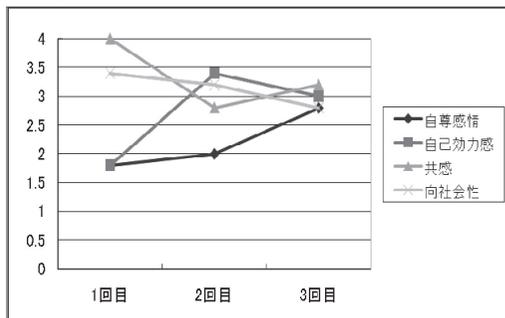


図6 生徒Dの変容

以上からわかるように、事前では「向社会性」得点が高く、「自尊感情」得点が低かった。ふれあい体験直後には、「自己効力感」得点上がり、「向社会性」得点が下がった。ふれあい体験の2週間後には、「自尊感情」得点が上がった。ふれあい体験の効果としては、「自己効力感」得点が上がったことがあげられる。持続的な効果としては、「自尊感情」得点が向上したことがあげられる。

この生徒は、ふれあい体験で一番心に残ったこととして、「牛にエサをあげたこと」をあげている。わかったこととして、「牛がどれだけ大事にされているか」をあげている。エサをあげたことにより、自分にもできるという「自己効力感」が育まれたと考えられる。またこの生徒は、酪農家が日々、牛を大切にし、牛のことを考えて、エサを与えたり牛舎を掃除したり、乳を搾ったりしていることを体験し、自分も同じように大切な存在であると感じ取ったのではないかと思われる。このことが、「自尊感情」の芽生えにつながったのではないかと考えられる。

4) 生徒Dの結果について

表8 生徒Dの結果

	自尊感情	自己効力感	共感	向社会性
1回目	1.8	1.8	4	3.4
2回目	2	3.4	2.8	3.2
3回目	2.8	3	3.2	2.8

以上からわかるように、事前では「自尊感情」「自己効力感」の得点が低くて、「共感」「向社会性」の得点が高く、それらの得点差が大きかった。ふれあい体験直後には、「自己効力感」得点上がり、「共感」得点が下がった。ふれあい体験の2週間後には、「自尊感情」得点上がり、「向社会性」が下がった。ふれあい体験の効果として、「自己効力感」得点向上したことがあげられる。持続的な効果として、「自尊感情」「自己効力感」得点向上したことがあげられる。

この生徒は、ふれあい体験で一番心に残ったこととして、「乳搾りをしたこと」をあげ、「牛の体温が高くて、ミルクも温かったこと」をあげている。わかったこととして、「牛が毎日たくさん牧草を食べて育っていること」をあげている。乳搾り体験によって牛の乳の温かさを感じたことや、自分にも乳搾りができたことから、「自己効力感」が育まれたと考えられる。普段口にしていない牛乳やバターのもとである乳絞りをしたという実感、日常生活の中で思い返され、自分はいったいものだという「自尊感情」の芽生えにつながったのではないかと考えられる。

4. 観察の結果

ふれあい体験について、自然観察法による観察を行った。複数の大学院学生が記録を取るとともに、研究者がビデオ録画した。ふれあい体験直後に酪農家へのインタビュー調査を行った。インタビュー時間は5分程度だった。

バター作りでは、「もうできているじゃない」、「できてきた。音がしなくなった」のように、お互いのできたかできないか確認しあう発言が見られた。また、「さすが、〇〇くん」、「すごいじゃん」のように、お互いを認め合う発言や、「ピンポン球みたい。卓球しようよ」、「卵の黄身みたい」のように、できたものを見せ合ったりする様子が見られた。「上手にできたね」と酪農家からほめられ、児童生徒は嬉しそうだった。

エサやりでは、酪農家からの「白いマツゲの牛がいる」、「牛はそれぞれ違っていて、いろいろな性格がある」といった言葉に促されて、牛を観察したりエサをやったりした。児童生徒はそれぞれエサやりをしながら、「(エサを)くずしてあげた方がいいよ」、「お尻がかわいい」、「でかいね」、「手をなめられそうだった」、「わ、そのまま食べた」、「牛って目がきれい」、「もっとこっちにあげたら?」など、牛への関心を示していた。中には、黙々とエサやりをする児童生徒もいた。牛がエサを食べるのを見るのが楽しそうだった。

乳搾りは、酪農家と牛と児童生徒一人ひとりで行った。搾乳の準備が整った場所に、児童生徒が一人ずつ行き、乳牛、酪農家、児童生徒の三者で乳搾りを行った。酪農家は一人ひとりに手ほどきをし、児童生徒は自分の手で乳を搾った。乳搾りを終えた児童生徒は、「乳が出てしまった」など口々に感想を言い合っていた。

子牛とのふれあいでは、息をのむような静けさが訪れた。子牛の前で、児童生徒は、はっと何かに気づいたようだった。この点について、酪農家にインタビューをした。以下は、酪農家の言葉である。

「乳搾りのときには子どもたちが自然に笑顔になっていて、本当の素顔を見せてくれたように思った。子牛のところでは、ずっと見ていたいと思っているという印象を受けた。静かに子牛の姿に見とれていた。ここで、これまでの体験のつながりができたのだと思った。自分たち人間が食べられない草を食べて、牛は牛乳を出す。その牛乳を乳搾りで実際に搾ってみたら温かい。命の温かさを自分の手で実際に感じる。子牛を見て、この子牛はあの牛乳を飲んで大きくなるということを実感する。自分たちが搾った牛乳、それは子牛の飲み物なのだが、それをいただいて自分たちは生き、成長する。この一連のつながりを実感した瞬間だったと思う。」

自分たちが作ったバターを使つての昼食会では、和気あいあいと食事をする様子が見られた。準備されたパンと野菜、チーズ、ハムなどをオープンサンドにして、牛乳とともに食する昼食会だった。自分の名前が書かれたトレーの中のバターを使うので、最初の体験が思い起こされ、気持ちが高まっているのが観察された。酪農家の周りに子どもたちが集まり、自然な笑顔で酪農家と交流をしていた。それ以外の子どもたちも、楽しそうにチーズやパンを食べ牛乳を飲みながら交流していた。

以上から、バター作り、エサやり、乳搾り、子牛とのふれあい、自分が作ったバターを使つての昼食会で構成された今回のふれあい体験は、個々の活動を体験したことだけではなく、一連の体験活動からいのちの

連関を感じ取ったことにも意味があったといえる。いのちは、一回性のものである。一回性のいのちを、それぞれがしっかり生きることでお互いに生かされている。草は生え、刈り取られる。刈り取られた草は牛のエサとなる。牛はエサを食べて大きくなり、乳を出す。その乳を飲み、また乳から作られたバターやチーズを人間がいただいて栄養にする。そして大きくなった人間が、草を植え、刈り取る。いのちの循環である。この永遠性への気づきが、今回のふれあい体験の大きな意味だったのではないかと考える。

総合考察

本研究から、酪農教育ファームの教育的効果として示唆されるのは以下の点である。

第1に、酪農家と乳牛とのふれあいは、児童生徒の「自尊感情」や「自己効力感」を育成するのに効果的だということである。どの活動がどの感情を育んだかは、児童生徒によって異なっているが、全体的に自分はいしたものだという自己に対する肯定的感情や、自分ではできるという自己の能力に対する肯定的感情が育まれたといえる。児童生徒の「自尊感情」や「自己効力感」を高めることは、現在の教育課題のひとつであるが、そのために酪農家や乳牛とのふれあい体験が効果的であることが示された。

酪農家の声かけに促されて、えさをやったら牛が食べた。この事実を周りの人に伝えたと受け入れてもらえた。「できた」と言っているのだ、「わかった」と言っているのだという雰囲気次第でできあがっていった。このことが、自分に対する肯定的感情を育むのに効果的だったと考えられる。

また逆に、自分がえさをやろうとしても食べない牛もいた。それは自分のせいではなく、牛にも性質の違いがあって、食欲旺盛な牛もいれば小食な牛もいることがわかった。このように、何もかも自分でできるわけではないことがわかったことも、自分に対する肯定的感情を高めるのに効果的だったと考えられる。

第2に、酪農家と乳牛とのふれあいは、「生命尊重」の価値にもとづく判断力の育成に効果的だということである。本研究の結果、「自尊感情」や「自己効力感」得点の向上と同時に、「共感」や「向社会性」得点の低下が生じることが示された。事前の予想では、「自尊感情」「自己効力感」「共感」「向社会性」のすべてにおいて、向上が見られるのではないかと考えられた。しかし予想に反して、「自尊感情」「自己効力感」といった自己に関する得点の向上と、「共感」「向社会性」といった他者に関する得点の低下が同時に起きていた。

ワークシート分析の結果からは、ふれあい体験によって、他者思考や自他相互思考が生じていることが示された。一見矛盾する結果から、ふれあい体験の効果について異なる側面が見えてくる。

鈴木ら⁹が指摘したように、日本の子どもたちは自己中心思考から他者思考へは比較的早く移行するが、他者思考から自他相互思考への移行には困難が伴う現状がある。自他相互思考を獲得する際には、ある基準に基づいて判断する価値的な考え方が必要とされるからである。今回の場合、ワークシートで示された自他相互思考の基準として、「生命尊重」の考え方が作用したのではないかと考えられる。「生命尊重」は、「価値があるもの」についてイメージとして、児童生徒に共通していることが予想されている¹⁰。この考え方をふれあい体験で感得したことにより、自他を超えるもうひとつの価値としての「生命尊重」が、判断基準として作用したのではないかと考えられる。その結果、自他のバランスの調整がなされたのではないかと考えられる。

第3に、ふれあい体験活動によって感情的理解だけでなく、知的理解も進められた点である。今回の体験活動では、感情的理解よりも知的理解を示す言葉が多く見られた。これには、酪農家自身による事前学習や体験時の声かけが大きな役割を果たしたと考えられる。事前学習でのワークシートには、「バター作りをしたい」、「牛にエサをあげたい」、「乳しぼりをしたい」など意欲的な意見が書かれていた。ふれあい体験当日は、酪農家から「白まつげの牛がいるよ」、「牛にも一頭一頭、好奇心の旺盛な牛や人見知りをする牛などがあります」、「牛さんが食べやすいようにするにはどうしたらいいかな」などの問いかけがなされた。これらの問いかけに答える形で、児童生徒は体験をしたと考えられる。「言われたことをやってみたらできた」という体験の積み重ねが、わかった喜びにつながったと考えられる。今回のような体験活動は、感情的理解を進める活動に位置づけられがちだが、今回のように酪農家の声かけや働きかけによって、感情・知識・体験のバランスのとれた活動になることが示された。また、事前学習－体験活動－事後学習をセットで行ったことも、効果的だったと考える。

第4に、いのちの一回性、永遠性に気づくことの教育的効果である。これは酪農教育ファームならではの教育的効果だといえる。日常、目にしたり口にしたりしている食べ物が、草のいのち、牛のいのちなどたくさんいのちの巡り合わせの結果なのだとこのことを知ることで、自分自身のいのちの一回性や永遠性への気づきをもたらされたのではないだろうか。これが「生

命尊重」の価値観育成につながったと考えられる。

以上のように、酪農教育ファームの教育的効果が示された。今後はこうした教育的効果を普及していくことが望まれる。

注記

本研究は、平成22年度酪農教育ファーム活動の教育的効果に係る実践事例研究分析（モデル事業）として、社団法人中央酪農会議酪農教育ファーム推進委員会の支援を受けて行われたものである。本論は、2011年度報告書の一部である。本研究にあたって、中央酪農会議酪農理解促進室三代絵里さん、酪農教育ファーム推進委員会事務局松原明子さん、酪農教育ファームファシリテーター石田陽一さんから多くのご支援とご示唆をいただいた。深く感謝申し上げます。

注

- 『子どもの対人関係認識の発達に即した道徳的判断力育成プログラムの開発（研究代表者 鈴木由美子）』科研費（18530712）研究成果報告書，2009年，参照。
- 鈴木由美子・永瀬美帆・藤橋智子他「道徳授業用の読み物教材に含まれる価値項目の分析」広島大学大学院教育学研究科学習開発学講座『学習開発学研究』第4号，2011年，pp.57-65，鈴木由美子・宮里智恵他「道徳的価値に気づかせるための伝記教材の開発」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』，第39号，pp.189-194参照。
- 堀洋道監修山本眞理子編『心理測定尺度集Ⅰ』サイエンス社，2001年，pp.29-31参照。
- 同上，2001年，pp.37-42参照。
- 堀洋道監修吉田富二雄編『心理測定尺度集Ⅱ』サイエンス社，2001年，pp.119-125参照。
- 堀洋道監修櫻井茂男・松井豊編『心理測定尺度集Ⅳ』サイエンス社，2007年，pp.95-100参照。
- 荒木紀幸「役割取得理論－セルマン」日本道徳性心理学研究会編『道徳性心理学 道徳教育のための心理学』北大路書房，1992年，pp.173-190、『子どもの対人関係認識の発達に即した道徳的判断力育成プログラムの開発（研究代表者 鈴木由美子）』参照。
- 荒木紀幸「役割取得理論－セルマン」，pp.173-190，参照。
- 『子どもの対人関係認識の発達に即した道徳的判断力育成プログラムの開発（研究代表者 鈴木由美子）』，参照。
- 鈴木由美子・永瀬美帆・藤橋智子他，前掲論文，参照。